

かである。湖盆の中央は広く平担である。

○集水区域は北部に広く、長瀬川は主要注入川である。この川は安達太郎山に源を発する硫黄川の水を運び川口近くの湖面では酸度が高い(PH4)、透明度は27.5mである。猫苗代湖の水は戸の口原に十六橋水門を作り水位を調節して、発電や灌漑用水の供給源として重要である。

猫苗代湖はPH4.7内外の強酸性でプランクトンが少く魚の生産量は少ない。コイ・フナ・ハヤなどの淡水魚が生息している。

東北岸に接した水中にはミズスキゴケが生育し、マリモに似て直径数0mのマリ状になるのでマリゴケともいわれている。元来亜寒帯から寒帯にかけての冷い湖水中に繁殖する植物であるが、わが国では最近までこしか知られていなかったのが天然記念物として保護されている。近年湖面低下をさせたことが原因で減じようとしている。底棲動物では20~50m付近には混虫類、ニス物の仲間、50m以深では環形動物等がある。

あさか  
○安積疏水

郡山盆地の西方の安積台地は火山灰におおわれ水が少ない。そのためこの台地を開発しようとする試みが明治6年に開成社という組織を作って始められた。この時は台地中の浸食谷や台地の一部に溜池を作り水田を開いた。現在開成山というところがその時開いた集落である。ところが失業武士の救済に苦勞していた明治政府は1898年オランダ人ファン・デル・レンに調査させ明治15年には5年かかって幹線延長52Kmの疏水が完成した。そのため7500haの水田に安定した水の供給ができるようになり産米は5倍となった。これは猪苗代湖の水を奥羽山脈中をトンネルで貫通した大工事で工業用水、飲料水にも利用されたが、不足して来たので新たに新安積疏水を作った。

吾妻、磐梯山及びその周辺(阿武隈川、阿多多羅山、信夫、白河)に関する文学作品

吾妻やまに 雪かがやけばみちのくの 茂吉  
我が母の国に汽車入りにけり  
吾妻山くんだりくんだりて聞きつるは  
ふもとの森のひぐらしのこゑ

~「あらたま」より

蔵王山

1882~1953

蔵王をのぼりてゆけばみんなみの  
吾妻の山に 雲のゐる見ゆ

~「赤光」より

山麓の二人

高村光太郎

二つに裂けて傾く磐梯山の裏山は  
険しく8月の頭上の空に目をみはり  
裾野とほく靡いて波うち  
裾野とほく靡いて波うち  
芒ぼうぼうと人をうづめる  
半ば狂へる妻は草を藉いて坐し  
わたくしの手にも重くもたれて  
泣きやまぬ童女のように慟哭する  
一わたしもうちき駄目になる  
意識を襲ふ宿命の鬼にさらはれて  
のがれる途無き魂との別離  
その不可抗の予感  
一わたしもうちき駄目になる  
涙にぬれた手に山風が冷たく触れる  
わたくしは黙って妻の姿に見入る  
意識の境から最後にふり返って  
わたくしに縋る  
この妻をとりもどすすが今は世に無い  
わたくしの心はこの時二つに裂けて脱落し  
巖として二人をつつむ此の天地と一つになった。

~智恵子抄より

樹下の二人

一みちのくの安達が原の二本松  
松の根かたに人立てる見ゆ一

あれが阿多多羅山  
あの光るのが阿武隈川。

-38-



かりやって言葉すくなくに坐つてみると  
うっとりねむるやうな頭の中に  
ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡ります。  
この大きな冬のはじめの野山の中に  
あなたと二人静かに燃えて手を組んであるよろこびを  
下を見てあるあの白い雲にかくすのは止しましょう。

あなたは不思議な仙丹を魂の壺にくゆらせて  
ああ何という幽妙な愛の海そこに人を誘ふことか  
ふたり一緒に歩いた十年の季節の展望は  
ただあなたの中に女人の無限を見せるばかり。  
無限の境に烟るものこそ  
こんなにも情意に悩む私を清めてくれ  
こんなにも苦渋を身に負ふ私に爽かな若さの泉を注いでく  
れる。  
むしろ魔もののやふに捉へがたい  
妙に変幻するものですね。

あれが阿多多羅山  
あの光るのが阿武隈川、

ここはあなたの生れたふるさと  
あの小さな白壁の点点があなたのうちの酒庫  
それでは足をのびのびと投げだして  
このがらんと晴れ渡った北国の木の香に満ちた空気を吸  
はう。  
あなたそのもののやうな此のひいやりと快い  
すんなりと弾力ある 困氣に肌を洗はう。  
私は又あした遠く去る  
あの無頼の都 混沌たる愛憎の渦の中へ  
私の恐れるしかも執着深いあの人間喜劇のただ中へ。  
ここはあなたの生れたふるさと  
この不思議な別箇の肉身を生んだ天地。  
まだ松風が吹いてゐます

もう一度この冬のはじめの物寂しいパノラマの地理を  
教へて下さい。

あれが阿多多羅山  
あの光るのが阿武隈川。

～智恵子抄より

あどけない話

ちゑ子は東京に空が無いといふ  
ほんとの空が見たいといふ  
私は驚いて空を見る  
桜若葉の間に在るのは  
切っても切れない  
むかしなじみのきれいな空だ。  
どんよりけむる地平のほかしは  
うすもも色の朝のしめりだ。  
ちゑ子る速くを見ながら言ふ  
阿多多羅山の山の上に  
毎日出てゐる青い空が  
ちゑ子のほんとの空だといふ。  
あどけない空の話である。

～智恵子抄より

西 行

武隈の松も昔になりたりけれども跡をだにとて見に  
罷りて詠みける

・枯れにける松なき跡の武隈はみきと言ひても甲斐なかるべし

<sup>あづま</sup> 東へ罷りけるにし**のぶ**の奥に侍ける社の紅葉を

・ときはなる松のみどりに神さびてもみぢぞ秋は朱の玉垣

陸奥の国へ修行して罷りけるに、白川の関に留まりて  
所柄にや常より月おもしろくあはれにて能因が「秋風  
ぞ吹く」と申けん折何時なりけんと思出でられて名残